

随想 井上靖『異国の星』

桜田 靖

一 はじめに

折りふしに昭和の名文に触れてみたくなる。
中でも井上靖の清冽な文体は、深山幽谷の清
らかな溪流の涼気が、皮膚から血管へ沁み入る
心地がする。「異国の星」は作家晩年の作品で、
昭和五十年代末に日経新聞の連載だった。八
つの短編小説で構成され、中国西域、シベリ
ア、ヒマラヤ、インドなど、作家が折々の旅
で眺めた夜空の星々に想いを寄せて、今は亡
き学友・戦友・一期一会の消息不明の人々達
に向かつて、霏々切々と語りかける枯淡な文
章は誠に圧巻である。まずは短編の題名を紹
介しておこう。上巻は、

・ ギルギット通信

・ カシユガル日記

・ ヒマラヤの月

・ 沙漠からの手紙

下巻が、

・ アムールの町

・ インダスの渡河点

・ 玉門関ノート

・ 天山の麓にて

であり、地名を耳にするだけでも旅情に誘われる。拙稿では「アムールの町」について所感の一端を述べてみたい。

二 シベリアの宵闇

作者はシベリア横断鉄道の長旅を経て、アムール（黒竜江）河畔の都市ハバロフスクに入った。遊覧船からアムール河に沿った三つの丘陵を眺め、断崖の上にある街を実感し、明治の榎本武揚の日記を思い出す。榎本は元幕府海軍高官、一度は函館五稜郭に籠って土方歳三らと「蝦夷共和国」の建設を志し、新政府軍に反逆したかどで処刑される身だったが、その才を惜しんだ明治政府から逆に高官に抜擢されるといふ数奇な運命については語る必要があるまい。その時榎本武揚四三歳、ロシア全権大使として、ロマノフ王朝の宮殿のあ

ったペテルブルグに滞在し、無事に使命の「カラフト・千島交換条約」の締結を終えていた。

榎本は帰国の途をシベリア大陸横断とし、馬車や船を何度も乗り換え乗り継ぎ、長旅の難路を踏破し、アムール河を下ってハバロフスクの河港へ夜の九時に到着したと記している。

時は明治十一年九月の末頃、作者は榎本の記述を想い、彼が波止場に到着し頭上高く振り仰いだシベリアの秋の星の光りを想起する。その頃のハバロフスクは、軍隊の駐屯地がなければ、単なる一寒村に過ぎないものだった。

まともな道もなかった当時のシベリアで、ようやく苦難の旅路の果てに約束の地を踏んだ榎本の安堵の心境が、「異国の星」の煌めきとして、読者に伝わる作者の筆致は実に冴え渡っている。

三 毛皮商人訪問

榎本は一夜を船中泊し、翌日、波止場の断崖を縄梯子で攀じ登り、噂の毛皮商人ブリュニン
アンドレイ氏を訪ねた。ロシア旅行

土産に、虎や豹の毛皮と日本茶の交易も追加しようとしたのかも知れない。榎本の「シベリア日記」によると、面会はごく短時間なもので、夫人と十八歳の令嬢も同席していたそうである。ブリュニン氏はザバイカル（バイカル湖の東側）出身で、六十歳位のさえない風采の男、妻も別段何でもない婦人だったが、令嬢だけは両親には似ても似つかぬ絶世の美少女だったそうである。主人は文盲、その奥様は従順で淋しそうな風情でありながら、娘さんは光輝満つ美貌の持主だった、と榎本は記している。両者の会談の詳らかな記述はないが、別れ際、この絶世のロシア美女からバラの花と野の花の花束を花瓶ごと贈呈されたことが、いたく榎本を感激せしめている。

作者も、この美少女の消息に興味深々となったようで、この後、物語はブリュニン・アンドレイ一家の運命やいかに、と末裔探しにやっきの探偵ものに転換するところが面白い。

五　ドラマに出演したがる人々

刑事が警戒するのは、捜査に協力してくれる市井の人々が、ドラマの出演者になった気分になり、空想や好奇心をもって聞き込みに応じることである。ただ面白半分、興味本位をもって事件の渦中に入り込み、結果的に事件捜査が攪乱されては、もとももない。事案の真相を把握してこそ犯人像も浮かんで来るのだ。特に新聞やテレビで喧伝される重大事件ほどこの傾向が強い。現場周辺の住人はドラマに入り込みたがり、おのが誇大妄想を語りたがる虚栄心がある。

さて、作者は洩るロシア人ガイドらを無理矢理に説得し、勧められたハバロフスク観光を途中で止めてブリュニンアンドレイ一家の痕跡捜しに熱中するが、この後、作者以上ガイド達も町の人々も探偵ドラマに熱くなり、支離滅裂の結果になるのだから、刑事が人の執拗な協力を嫌がるのももったいなくとだ。

六 オールドタウンにて

そのかみのプリューニン一家の末裔発見の端緒を、先ずは役場や教会の古文書に求めたが糸口は皆無だった。今や、ハバロフスクは極東ロシアの大都市であるが、榎本が訪ねた頃は過疎の集落に過ぎなかった。ガイドによると、現在「オールドタウン」と呼ばれるハバロフスク発祥の地に一家は居を構えていたと推測された。そこは壁で囲まれた一区画で木戸を開閉して出入する。古い町中の一軒一軒を訪ね、老人を見つけては聞き込みをするが、みんな勝手に自分の昔話を夢中で語り、全く要領を得ない。だが「ここにはプリューニンの曾孫が住んでいるらしい。」とまことしやかに言う者もいて期待を捨てられない。

作者は六十年配の上品な老婦人に出会った。九十過ぎの父親が昔のことなら何でもよく知っている、プリューニンとは聞いたことのあつた名前だ、と希望を持たせる。但し、頑迷で気難しくよつぽど上機嫌でないと滅多に口を利かない偏屈爺さまだそうだった。唯一の特

みは幼い孫娘がいて、その子の言うことならば聞くかも知れないという。早速、天使のようになり可愛らしい目のパッチリした七、八歳の赤い服の幼女を爺さまに差し向けたが、その日は殊更に機嫌が麗しくなく無駄骨に終わった。作者が、その子にボールペンを上げたら、パツと花でも開いたように明るい顔をしたと書いている。

「オールルドタウン」は迷路になっでいて、その後もガイドらは熱心に老人の住む家を手導いてめぐり歩いたが、結局は何の手掛かりもなく徒労に終わってしまった。作者が気がかりになったのは、一行の行く先々を密かに付きまとう先程の赤い服の幼女の影だった。その子はボールペンをくれた日本人から好奇の目を離せなかったようだ。作者は、後で先程の上品な老婦人が、かつてのブリューニョ家の令嬢ではなかったのかと同行の詩人に言っで、明治十一年に十八歳の少女が存命していたら、今年でちょうど齢百十八歳になっで

いるよ、と笑われる始末である。遂にブリュ
ーニン一家の子孫搜索は諦めて帰ることにし
た。

駐車場所に近いとガイドが告げたので、作
者は何の雑作もなく裏木戸の扉を押し開けた。
何と扉の裏に赤い服の可愛い追跡者がいたの
だ。木戸の扉の隙間から中の様子を覗ってい
たのだろう。幼女を転ばせて大泣きさせる破
目になってしまった。

七 ホテル玄関先の出来事

転んだ幼女のヒジに擦過傷があつたので、
自分のハンカチを包帯代わりにしてやったが
泣き止まない。こんな時に幼女を泣きやめさ
せる万国共通の手口はあつた。作者は目にし
た駄菓子屋でドロップスの缶を買い、一粒口
に入れさせ缶ごと渡したら、パツと明るい顔
になってスキップするように帰るのだから可
愛いものである。作者は、その後ガイド達と
レストランでゆっくりと食事を楽しみ、降る
ような満天の星の下のアムール河畔を散策し、

一人で夜の十一時頃ホテルに帰った。

ホテルの暗い玄関口に、何と昼間の上品な老婦人と赤い服の少女が待っていたのだ。ドロップスのお礼だろうか、何時間くらい立って待っていたのだろうか、お互いに言葉が通じない。そのうち、婦人に肩を押されるように少女が近寄って来て、花束を差し出された。あつけにとられながら、「スパシーバ！（有り難う）」と作者が頭を撫でてやると、少女は例のパツと花が開いたような笑みを浮かべ祖母のもとに戻った。すぐに二人は手をつないで去って行ったそうである。

作者は部屋に戻って花束を見て驚いた。何とバラの花と野の花が一緒にくくられて小さな花瓶に入っていたのだ。かつて榎本武揚が彼を心酔せしめる程の絶世の美女から貰ったものと同じ仕様なのだった。以下は、作者が榎本の日記調に綴った原文のままを掲載して感動を伝えよう。ブリュニン一家の消息を訪ね、花束だけが出現したような不思議さが

よく分かる。

「氣難しき祖父と優しき祖母に慈しまれ育っている孫娘は、人をして心酔せしむるほどの可憐なる幼女にして、齡七、八歳ぐらいならんか。彼女は祖母と共に余がホテルまで出向き来たり、バラの花と野の花を花束にして花瓶に入れしものを余に呈せり。余は明日、この花束をシベリア横断鉄道の列車の車室の中に持ち込み、窓際の卓を飾らんと思う。――深更に及びホテルの部屋の窓を開けると、北斗蘭干、アムール河畔の深き闇の中に、今やわがハバロフスクの町は睡れり。」

原文に「祖父」とあるのは、正しくは「曾祖父」と書くものだと思う。

八 終わりに

私は百年という時間の長さに感じ入った。この時間の長さは、個人の営みを消し去るのに十分な長さがある。断絶、非連続ということを勃然と考えたことがある。十数年も前のことになったが、東京ドームの日本シリーズ、

巨人対西武の試合は、大入り満員で喧騒を極めていた。その時、ここに百年の時間が流れたらどうなっているだろうか、という思念がふと浮かんできた。今、騒々しく一喜一憂している五万人もの野球ファンが間違ひなくほとんど全員消滅しているのだ。悠久の時の流れに較べたら、たったの百年でブリーニン夫妻も絶世の美少女も跡形もなく消えてしまう人の世とは幻のようなものだ。

私も外国では努めて星を見つめるようにしている。しかし、都市の猥雑な灯りの中では星はほとんど見えない。治安の悪さで夜間外出は控えるところも多い。それでも、アラスカのフェアバンクスの満天の星、ドイツの田舎町バツハラッハのライン川の上空に冷たく光っていた北斗七星、ニュージーランド南島、サザンアルプスの麓の町で眺めた神秘的な南十字星の光、私の異国の星も瞼の裏から消えない。但し、井上靖のように異国の星に向けて何かを語ろうという気持ちは起きない。ま

だ、そんな年令になっていないのだ、とある種の奇妙な安堵感を覚えている。

『異国の星』上下巻は、講談社文庫として出版され発売されています。

終